

司式:大谷 昌恵
奏楽:吉田千鶴子

前奏:「ああ主よ、哀れなる罪人われを」(0. ブクステフーデ)

招詞:主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。

主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。(イザ 55. 6, 7b)

讃美歌:8「心の底より」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①エレミヤ書 31. 31-34

- 31 見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。
32 この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。
33 しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。
34 そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

朗読聖書②マタイによる福音書 9. 14-17

◆断食についての問答

- 14 そのころ、ヨハネの弟子たちがイエスのところに来て、「わたしたちとファリサイ派の人々はよく断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか」と言った。
15 イエスは言われた。「花婿と一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。そのとき、彼らは断食することになる。
16 だれも、織りたての布から布切れを取って、古い服に縫ぎを当てたりはしない。新しい布切れが服を引き裂き、破れはっそうひどくなるからだ。
17 新しいぶどう酒を古い革袋に入れる者はいない。そんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、革袋もだめになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。そうすれば、両方とも長もちする。」

祈禱

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。三月最初の日を主の日として迎え、新しい月も主と共に歩むことを願う私たちをここに呼び集め、あるいはオンライン礼拝の場へと集めてくださり、祈りと賛美をもって、この一日を始めることを許されました幸いに心から感謝申し上げます。

受難節第二主日となり、私たちは日々、主の十字架への歩みを思い、その御苦しみと痛みを思いつつ、日々の生活を送ることを願いながらも、自らの思いと生活に追われ、主の十字架を仰ぎ見る時を十分に果たせない日々を過ごしております。そのことを心から懺悔すると共に、悔い改めをもってここからの日々を歩んでいけるように、どうぞお導きください。

先週2月24日でロシアがウクライナに侵攻してから4年が経ちました。未だ解決に向けての道筋は明らかにならず、多くの人の尊い命が奪われ続けています。ウクライナだけでなく、イランを巡る問題や、その他世界各地で戦いや暴力、災害に苦しむ人、貧困や上に苦しむ人々が多くいます。どうかそれらの人々をお救いください。対立ではなく、和解を望む私たち

にその道を歩むための道筋をお与えください。そして毎年三月の第一金曜日、今年は3月6日が『世界祈祷日』です。この日には教派を超えて、和解と平和を求めて世界中で祈りを合わせます。今年は特にナイジェリアにある教会とその働きのために祈ります。日本の中にいるだけでは、なかなか世界中の教会の働きを知ることができません。僅か年に一度の世界祈祷日ですが、どうか世界の教会の現状や働きを覚えて、一人ひとりが祈りを献げられますようにお導きください。

神さま、今年の3月11日で東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故から15年になります。何年経っても終わりということではなく、今もまだ震災被災地として、また原発汚染によって被害を受けた場所として、多くの地で苦しむ人がおられます。時間の経過と共に、そしてその後起こった多くの災害によって、私たちは15年前の災害のことを忘れがちになりますが、どうかその場で今も苦しむ人々に心を寄せ、祈りと支援を続けられるようにしてください。これ以上の悲しみと苦しみが生まれることのないよう神さまがお守りください。

本日の礼拝も、私たちは御言葉の取り次ぎをしてくださる牧者を与えられた幸いに感謝致します。説教をしてくださる佃雅之牧師の上に、あなたが聖霊を豊かにお注ぎください。語る牧者を豊かに祝福し、その御言葉が私たちの心にしっかりと届くように、聞く者の心も整えてください。

今日、日本中、世界中で献げられる全ての教会の礼拝の上にあなたの豊かな祝福とお恵みがありますように。この感謝と願いの祈り、主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げを致します。アーメン。

オルガニスト任職式

合唱:「最後の晩餐」 聖歌隊

説教 「新しいぶどう酒を入れる器」

佃 雅之

今日与えられた福音書に記されていることは、「キリストによって示された新しさとは何か、そしてその新しさは私たちをどこへ導こうとしているのか」ということです。冒頭に「そのころ」と書かれています。これは「その時に」という意味です。つまりこの出来事は、直前の出来事から続いています。キリストは徴税人マタイを弟子として招かれました。徴税人は当時のユダヤ社会では裏切り者・罪人の代表のように見られていた存在です。そのマタイの家でキリストは食卓に着かれました。その食卓には律法を守れない者、周囲から軽蔑され、汚れていると見做されていた人々が招かれたのです。敬虔なユダヤ人なら罪人と一緒に食卓を囲むようなことはしません。自分まで汚れてしまうと考えるからです。しかしキリストは、汚れを恐れて離れるのではなく、むしろ罪人の中へと入って行かれました。罪人と呼ばれた人が、ただ神の恵みによって招かれ、同じ食卓に着くことができる、行いではなく、相応しさでもなく、恵みによってのみ座る、ここにキリストがもたらされた「新しさ」があります。

ところが、その様子を見て疑問を抱いた人たちがいました、それがヨハネの弟子たちです。このヨハネは“洗礼者ヨハネ”と呼ばれ、“荒野野で悔い改めを宣べ伝え、質素な生活を送りながら、来るべき救い主の道を整えた預言者”でした。そのヨハネの弟子たちが尋ねます。「なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」「断食」はユダヤ人にとって大切な意味を持っています。ある時は“悔い改め”の印として、また或る時は“深い悲しみの中で神に近づくための行い”

でした。「断食」はただ食べ物を断つことではありません。“自らの無力を認め、神の前に謙り、救いを待ち望む姿勢”です。断食は苦しいものです。それでも彼らには真面目に守っていました。彼らには断食をせず、罪人たちと食卓を囲むキリストと弟子たちの姿は、とても真剣な信仰には見えませんでした。

私たちの心にも同じような戸惑いと苛立ちが生まれることがあるのではないのでしょうか。自分には真面目に守ってきたものがある、努力してきた信仰の形がある、私たちは自分を基準にして人を測ります。自分の価値観を絶対視する時、私たちは自分に合わない人を排除し、自分の正しさを守ろうとします。けれども神は私たちの思いを超えて人を招かれるのです。その時神が私たちに求められていることは、他人を裁く目ではなく、神が今為さっていることに心を開くことです。

キリストが彼らに言われます。「花婿と一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。」キリストはここで、ご自身を「花婿」に譬えられました。花婿は婚礼の席に友人たちを招きます。その場に集う人々が笑い、食べ、語り合っている姿を見て心から喜ぶものです。もし招かれた人が断食を始めたとしたらどうでしょうか。皆が祝い喜び合っている中で、一人だけ食べずに沈んだ顔をしているなら、その人は祝いの喜びに水を差すこととなります。今まさに“罪人”と呼ばれていた人々が同じ食卓に着いています。そこは「花婿」であるキリストの喜びの席でした。神に「来てください」と願う時は終わったのです。“待ち望んでいた救い主は、今、目の前におられる”のです。だからこそ「断食の時ではない」と言われています。キリストが来られた今、弟子たちはその恵みを喜ぶ者とされました。“待つ時から与えられている時へと時が変わった”のです。

しかしキリストは続けてこう言われました。「花婿が奪い取られる時が来る。そのとき、彼らは断食することになる」。「彼らは」とはキリストの弟子たちのことであり、私たちのことでもあります。今、私たちは受難節を歩んでいます。受難節はキリストが私たちの罪を担い十字架を背負ってくださったことを覚える時です。弟子たちの前でキリストは捕らえられ、裁かれ、十字架へと引き渡されました。私たちは知っています。花婿が奪い取られたのは私たちの罪のためです。私たちが神よりも自分を優先してきた罪を主が引き受けてくださいました。罪の大きさを知った者だけが恵みの大きさを。恵みの大きさを知った者だけが福音の尊さを知る。だからキリストの弟子となった者は苦難の中にあっても福音を語り続け、命さえ惜しまない歩みへと導かれていきます。

キリストは続けて「喩え」を語られます。「織りたての布から布切れを取って、古い服に継ぎを当てたりはしない」、新しい布が古い服をかえて裂いてしまうからです。衣服は貴重なものです。破れば継ぎを当てて長く使います。しかし、新しい布は縮みます。それを古い服に縫い付けると新しい布の縮む力で古い服をさらに裂いてしまいます。ここで大切なのは、古い布が悪い、新しい布が良い、ということではありません。古い布と新しい布は、その性質に違いがあるということです。同じように、「新しいぶどう酒を古い革袋に入れる者」もいません。発酵の力で革袋は裂け、ぶどう酒は流れ出てしまいます。

この二つの喩え話には“古い物を壊さないように”という配慮を感じます。“新しいものを無理に降るものに結び付ければ、両方を損なってしまう”という警告です。無理な結びつきは共倒れを生むからです。主が求めておられるのは古いか新しいかを争うことではなく、神が、今始めておられる御業を受け留

める、しなやかな心です。

「新しいぶどう酒」は“福音・キリストご自身”です。「革袋」とは“私たち教会”です。教会には夫々に歴史があり、の中で培われ、大切に守られてきた伝統があります。しかし、“昔からこうだったから”という理由だけで、全てをそのままにしておいて良いわけがありません。もし歴史や形に拘り留まり続けるなら、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出てしまいます。また反対に、“新しい方が良い”という思いだけで、“何でも変えてしまえば良い”ということにもならないでしょう。私たちは皆、この教会を愛してきました。だからこそ形を守ろうともしてきました。しかし、もし私たちが形を守ることに心を奪われ、互いに疲れ、対話が止まってしまうなら、それは主が望まれている姿ではありません。キリストが教会に求めておられることは、組織の維持よりも、祈りが自然に起こること、役割よりも、関係が生きていること、形よりも、人が生かされていること、恐れよりも、希望が語られていることです。“神は形を守ることも、キリストに従うこと”を求めておられます。問われていることは、“今、主が何を始めておられるのか”、“今、主が何をされようとしておられるのか”です。

もっとも、この時の弟子たちは、主の語られた「新しさ」を理解してはいませんでした。何時分かるのでしょうか。“主が約束された聖霊が注がれた時”です。あのペンテコステの日、聖霊が注がれた時、彼らは十字架と復活の意味を悟ります。そして彼らは、その霊によって自分たちが既に「新しくされていた」ことに気づくのです。理解が先にあつたわけではありません。聖霊によって生かされて初めて分かったのです。キリストの「新しさ」は、外から眺めて分かるものではありません。主に触れられ、主の霊に充たされて、初めて知ることができることです。

今日は預言者エレミヤの言葉も読みました。ここに「新しい契約」という言葉があります。「新しい契約」とは、“神が人の心に直接働き、罪を赦して関係を回復してくださる”という約束です。その約束が現実となったのがイエス・キリストにおいてです。主は十字架で私たちの罪を担い、復活によって新しい命を開いてくださいました。神は十字架と復活によって私たちと「新しい契約」を結んでくださったのです。エレミヤは続けて語ります。「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。」“神ご自身が、私たちの内に働いてくださる”という約束です。これが“聖霊の約束”なのです。神の霊が私たちの心に働き、私たちを内側から「新しく」し、神を知る者としてくださる。これは“外側の改革ではなく、内側からの創造”です。

エレミヤが語った「来るべき日」はキリストにおいて始まり、聖霊によって、今、ここに実現しているのです。だからこそ私たちは、“キリストが新しいぶどう酒であることを知り、私たちがまた聖霊によって『新しい器』とされる”のです。

しかしこの「新しさ」は人々にとって容易に受け入れることができるものではありませんでした。断食をせず、罪人と食卓を囲むキリストの姿は宗教的秩序を重んじる人々に波紋を広げました。実際ファリサイ派やヨハネの弟子たちは戸惑い反発しました。やがてキリストの存在そのものが受け入れ難いものとなり、主は十字架への道を歩まれることとなります。「新しさ」はしばしば反発を招くものです。私たちはどうでしょうか。キリストの示される「新しさ」を受け入れ、柔らかく、しなやかな器として歩んでいるでしょうか。

“新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるものだ。” 宗教改革者たちは、この喩えを真剣に受け止めました。ルターは“福音は人間の功績や制度の上に付け足され

るものではない。福音は教会そのものを絶えず新しくする力である”と理解しました。ルターの語った“信仰のみ・恵みのみ・聖書のみ”、これらの言葉は、“福音こそが教会の命である”ことを取り戻そうとする叫びでした。カルヴァンが問題にしたのも、伝統の古さではなく、神の言葉よりも人間の慣習が優先されていることでした。礼拝においても、教会制度においても、“それは聖書に基づいているのか”と問い続けたのがカルヴァンです。

改革とは何かを壊すことではありません。御言葉に立ち帰ることです。高倉徳太郎牧師は、教会が新しい革袋であるために聖日礼拝の厳守を中心に置きました。この言葉の意味を次のように説明されています。“一週間の門出を、十字架のキリスト、復活の主と共に、またその栄光を仰いで為すために、聖日礼拝を主にある兄弟姉妹と共に守ることは、教会員たる者の、聖なる、また喜ばしき義務であらねばならぬ。日曜日の礼拝は新しい一週間の始まりです。その門出を十字架のキリストと共に、復活の主と共に始めるのだ。”と高倉牧師は言います。“聖日礼拝は教会員の義務”と言われています。しかしそれは窮屈で息苦しい強制ではありません。“神に赦され、教会に連なる者としての当然の務め”という意味です。なぜなら、“礼拝は私たちの命の源だから”です。

同じ恵みに与る者たちと共に、同じ主を見上げ、同じ御言葉を聴く。そこに教会の姿があります。高倉牧師にとって教会とは、優れた人の集まりではなく、自分が罪人であることを知らされた者たちの共同体です。徴税人と共に食卓に着かれるキリストの姿は教会の本質を示しています。私たちもまた、その食卓に招かれています。本当の「新しさ」とは、キリストと共に生きるということです。教会を新しくするのは人の知恵ではありません。神の御言葉です。“昔からこうだから”でもなく、“今はこういう時代だから”でもなく、“主は何と言われているのか”を問い続ける、そこに「新しさ」の源があります。

教会の中心は“十字架と復活の福音”です。“主が私たちの罪を赦して新しい命を与えてくださった”という喜びの知らせです。この中心が保たれる時、革袋が裂けることはありません。“神は今日も私たちにキリストという新しいぶどう酒を注ぎ、新しい命へと送り出してください。この恵みは尽きることがありません。花婿は今もここにおられます。”お祈りを致します。

聖なる神、あなたはキリストにあつて、私たちを新しくしてくださいました。どうか私たちの教会に御言葉を与え、あなたの福音に相応しい器としてください。新しくされることを恐れず、ただキリストの恵みに立つ群れとしてください。私たちを終わりの日まで、十字架と復活の主と共に歩ませてください。主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:542「主が受け入れてくださるから」

聖晩餐 ニカイア・コンスタンティノポリス信条の告白

和解の挨拶

讃美歌:79「みまえにわれらつどい」

献金・感謝(西窪幸子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天にいらっしゃいます主イエス・キリストの父なる御神さま、今日、私たち一人ひとりの名前を呼んで、ここに、またオンライン配信の場に呼んでくださり、あなたに礼拝を献げることができました恵みを心から感謝致します。また、講壇を通して、あなたの御言葉の説き明かしを聞くことができましたことを心から感謝致します。今日は月の第1聖日、私たちは聖

晩餐に与ることが許されました。あなたによって新しくされ、一つとされた喜びを心から感謝致します。

新しいオルガニストを私たちの教会に与えてくださりましてありがとうございます。また聖歌隊の合唱によって、あなたの十字架を思う時を与えられましたことも心から感謝致します。私たちにとって、あなたの十字架を見つめることは決して簡単なことではありません。それはとても辛いことです。私たちの弱さ、私たちの醜さを見つめなければなりません。けれどもあなたはそういう私たちを赦して本当に愛してください。その愛を本当に受け取ることができるようにしてください。

世界では戦争や災害、そして抑圧によって苦しんでいる人がたくさんいます。あなたはいつでも、そこに一緒に立ってくださいます。どうか私たちがそのあなたに祈りをもって連帯していくことができるように私たち一人ひとりを支えてください。全てをあなたによって整えられ命をさされています。今献げました献金は、私たちの感謝のしるしです。御用のために用いてください。あなたから教えて頂いた「主の祈り」を愛する兄弟姉妹と共に祈り、新しい一週間を始めさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌:89「共にいてください」

派遣と祝福(司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。 会衆:私がここにおります。私を、お遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。)

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:(1)受難節全体祈禱会案内、(2)支援特別委員会:東日本大震災被災地支援事業の継続、(3)2026年度信濃町教会連帯資金運営委員会:推薦受付の案内、(4)北支区連合祈禱会案内

後奏:「キリストよ、受難せる汝に栄光あれ」(J.S.バッハ)